



行事紹介

○十夜法要

十夜法要とは、毎年秋に行われる伝統的な仏教の法会のことです。十月から十一月にかけて各地で法要が行われます。「お十夜」などとも呼ばれますが、「十日十夜法要」が正式名になります。法要は、旧暦の十月五日の夜の夜から十五日の十日十夜にわたり行われていましたが、今では日数を減らし三日間や一日のみなど減っていく傾向にあります。阿弥陀如来に感謝の念仏を唱える、主に浄土宗の仏事のひとつです。宗派や寺院によって作法が異なり、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えたり、念仏を唱えながら数珠を手繰るお寺もあります。また、十夜法要の時期は秋の収穫期と重なるため、仏前に新米や赤飯、おはぎなど供えし、持ち寄った食べ物を皆で分け合って食べる習慣があり、さらに関東では太鼓を鳴らしたりとにぎやかに行われることも多かったようです。期間中に近隣の寺院を訪れてみると新たな気づきがあるかもしれませんね。



今月のことば

ういてんべん よ なら 有為転変の世の習い

世の中の物事すべては常に移り変わり、常住不変のものは何一つない。世の中は無常であり、はかないことのたとえ。すべては何らかの原因があり、その結果変化していくことを表している。周りや物事に流されず、自分自身をしっかり持つことが大切です。変化していくことは悪いことではないですが、今という時を大切にすることが大事ですね。



コラム あれもこれも仏教用語

○ありがとう

感謝の気持ちを表す言葉として使われる「ありがとう」の言葉。この言葉も由来は仏教からという説があります。様々な経典で用いられる例え話で「盲亀浮木」というお話があります。ある日お釈迦様が弟子のひとりに「人間として命を授かったことをどう思っているのか」と尋ねました。弟子は「とても喜びを感じています」と答えました。それを受けてお釈迦様は「果てなく広い海の底に、盲目の亀がいる。その亀が百年に一度、海面に顔を出す際、海に浮かぶ流木に空いた穴に丁度頭を入れることがあると思うか」と尋ねられました。弟子がそんなことはほとんど不可能で考えられないと返すと、お釈迦様は「皆があり得ないだろうと思うだろう。しかし全くないとは言えない。人間に生まれるというのは、この例えよりもさらにあり得ないことで、とても有り難いことなのだ」と説かれました。

「有難い」とは滅多にないことであり、喜ぶべきことであるとの教えが崩れて「ありがとう」となったとされています。

はじめての仏教

○一切皆苦

生まれること、老いること、病むこと、死ぬことという「生老病死」の四つの苦Ⅱ「四苦」がお釈迦様を修行の道へと向かわせました。「苦」とは「思い通りにならないこと」をいいます。このため、お釈迦様は真理を悟った後、はじめに「人生は思い通りにならない」という真理を説かれました。

四苦のうち「生」は生きる苦しみではなく「生まれる苦」のことをいいます。いつ、どこに、どんな姿で生まれてくるのかを誰も決めることはできないという苦しみです。身分制度の厳格なインドでは特に重んじられたことでした。

お釈迦様はこの四苦に、さらに四つの苦しみを加えて初めての説法である「初転法輪」で「八苦」として説かれました。

【愛別離苦】愛する人との別れる苦しみ

【怨憎会苦】憎しみを抱いている人と会う苦しみ

【求不得苦】どれだけ求めても得られない苦しみ

【五蘊盛苦】心と体は五蘊（色・受・想・行・識）から成り、煩惱の原因となり、思い通りにはいかな

い
これらを合わせて「四苦八苦」といいます。

何事も自分の思い通りにならないという真理Ⅱ「一切皆苦」を、まずもって人生の大前提として受け止めること。お釈迦様の数ある教えのすべては、ここからはじまっています。